

修士論文（要旨）
2024年1月

児童における拒絶に対する過敏性に関する尺度作成と信頼性および妥当性の検討

指導 小関 俊祐 准教授

国際学術研究科
国際学術専攻
心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野
222J2014
渡邊 美咲

Master's Thesis (Abstract)
January 2024

Creation and examination of reliability and validity of the scale of characteristics of hypersensitivity to rejection in elementary school students

Misaki Watanabe
222J2014
Master of Arts Program in Clinical Psychology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Shunsuke Koseki

目次

第1章：問題と目的	1
1.1 問題	3
1.2 目的	3
1.3 仮説	3
第2章：方法	3
2.1 調査対象者	3
2.2 調査期間	3
2.3 調査材料	3
2.4 尺度作成の手続き	4
2.5 調査実施の手続き	5
2.6 倫理的配慮	6
2.7 倫理審査	6
2.8 分析方法	6
第3章：結果	7
3.1 項目分析	7
3.2 尺度の因子構造	7
3.3 信頼性の検討	10
3.4 併存的妥当性の検討	10
3.5 小学生用拒絶感受性尺度と子ども版拒絶に対する過敏性に関する尺度（C-IPSM）の比較相関	11
3.6 抑うつ高群と抑うつ低群における子ども版拒絶に対する過敏性に関する尺度（C-IPSM）の差異の検討	11
3.7 子どもの拒絶に対する過敏性と抑うつに関連の検討	12
第4章：考察	13
4.1 尺度作成の考察	13
4.2 作成した尺度と抑うつに関連についての考察	15
第5章：総合考察	16
第6章：本研究の限界と展望	17

参考文献

資料

第1章：問題と目的

拒絶過敏性は、「他者から拒絶されることを心配・予期し、すぐに知覚し、過度に反応する傾向」(Downey & Feldman, 1996)と定義されている。成人を対象とした研究において、拒絶過敏性が高い者ほどうつ症状が高いことが明らかになっている(巢山他, 2014)。巢山他(2014)は拒絶に対する過敏性に関する尺度(IPSM)を日本語に翻訳し、因子構造を明らかにした上で日本語版であるJ-IPSMを作成した。

しかし、日本語版の拒絶に対する過敏性に関する尺度(巢山他, 2014)は青年期を対象に作成されたものであり、児童を対象としていない。児童の拒絶過敏性を測定することは、児童の抑うつに影響を与えている特性を理解し、抑うつ予防として早期にアプローチできるという利点がある。よって、児童の拒絶に対する過敏性を適切に測定するためには、児童期を対象とした版拒絶に対する過敏性に関する尺度を作成する必要がある。子ども版拒絶に対する過敏性に関する尺度の作成により、児童期の抑うつとの関連について適切に検討することができ、児童期におけるうつ病の早期発見・早期対応の一助となる可能性が考えられる。

本研究では、子ども版拒絶に対する過敏性に関する尺度(C-IPSM)の作成と信頼性および妥当性の検討を目的とする。さらに、C-IPSMと各因子が抑うつとどのような関連があるのかを検討する。

第2章：方法

全国の小学校に通う小学校5～6年生 224名(男女問わず)を対象に質問紙調査を行った。使用した尺度は、デモグラフィックデータ(学年、性別)、子ども版拒絶に対する過敏性に関する尺度(C-IPSM)、対人的傷つきやすさ尺度(鈴木・小塩, 2002)、小学生用拒絶感受性尺度(三島, 2014)、児童用抑うつ自己評価尺度(村田他, 1996)である。

C-IPSMの尺度作成は、J-IPSM(巢山他, 2014)をもとに項目の内容は変えず、小学校高学年が理解できるような言葉や言い回しに修正し、確認を行った。調査実施対象先に電話、Zoom、郵送などを用いて研究趣旨説明および調査実施を行った。

第3章：結果

224名のうち、最終的に121名が分析対象となった。

C-IPSMの因子構造を明らかにするため、最尤法による探索的因子分析を行った。最終的に、5因子 21項目が抽出された。第I因子は、他者の評価を気にして不安になり、相手に合わせようとすることを意識していることを表す項目であったため「他者評価追従」と命名した。第II因子は、周囲からの評価を気にし、悪く思われていないかを意識していることを表す項目であったため「批判されることへの懸念」と命名した。第III因子は、現実には振る舞っている自分と本当の自分が異なり、本当の自分を知られてしまうと自身の評価が下がってしまうことを懸念していることを表す項目であったため「社会的自己像と真の自己像の不一致」と命名した。第IV因子は、否定されたり怒られたりすることで関係性が悪化することに不安を感じることを表す項目であったため「関係破綻の不安」と命名した。第V因子は、他者に対して怒ったり、評価してしまったりすることで傷つけてしまうのではないかという不安から自己主張できないことを表す項目であった「他者を傷つける不安による非主張性」と命名した。

C-IPSMの信頼性を検討した結果、尺度全体で $\alpha=0.89$ という値が得られた。また、妥当性を検討した結果、妥当性尺度と $r=0.55\sim 0.60$ の中程度の有意な正の相関が認められた。

高抑うつ群と低抑うつ群において、C-IPSMの程度に差異が見られるかどうかについて検討するため、独立変数を群、従属変数をC-IPSMとしたt検定を行った結果、C-IPSMの第I因子($t(113)=5.12, p<0.001$)、第II因子($t(112)=2.15, p<0.05$)、第III因子($t(113)=4.34, p<0.001$)、合計得点($t(112)=3.27, p<0.01$)で低抑うつ群よりも高抑うつ群の得点が有意に高いことが示された。

拒絶に対する過敏性が抑うつに与える影響性について検討するために、C-IPSMの各下位因子を説明変数、児童用抑うつ自己評価尺度の合計得点を目的変数としたステップワイズ法よ

る重回帰分析を行った結果、重回帰が有意であり ($R^2=0.29$, $p<0.001$)、標準回帰係数は「第Ⅰ因子」($\beta=0.26$, $p<0.05$)「第Ⅲ因子」($\beta=0.38$, $p<0.001$)が有意な正の値を示した。

第4章：考察

子ども版拒絶に対する過敏性に関する尺度(C-IPSM)は「他者評価追従」、「批判されることへの懸念」、「社会的自己像と真の自己像の不一致」、「関係破綻の不安」、「他者を傷つける不安による非主張性」の5因子21項目から構成されることが明らかとなった。因子構造としてはJ-IPSMと同様のものであることが示唆されたため、児童と青年期の人では、拒絶感受性の構成要素が類似したものであることが考えられる。また、C-IPSMは信頼性および妥当性を有する尺度であることが考えられる。

高抑うつ群の方が低抑うつ群よりも、他者からの評価を不安に感じ相手の反応を伺う、批評されることを懸念し他者から自分がどう思われているのかを気にする、本当の自分を他者に知ってほしくないと考え自身を偽るといった傾向があると考えられる。他者から悪い評価を受けていることを気にして不安になり、相手に合わせようとすることで、現実に振る舞っている自分と本当の自分が異なっていき、抑うつ傾向が高くなると示唆された。

参考文献

参考文献

- Downey G. & Feldman SI. (1996). Implication of rejection sensitivity for intimate relationships. *J Pers Soc Psychol* 70, 1327-1343.
- 三島 浩路 (2014). 小学生用拒絶感受性尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集 56, 435.
- 村田 豊久・清水 亜紀・森 陽次郎・大島 洋子 (1996). 学校における子どものうつ病—Birleson の小児期うつ病スケールから検討— 最新精神医学 1(2), 131-138.
- 巢山 晴菜・貝谷 久宣・小川 祐子・小関 俊祐・小関 真実・兼子 唯・伊藤 理紗・横山 仁史・伊藤 大輔・鈴木 伸一 (2014a). 本邦における拒絶に対する過敏性の特徴の検討—非定型うつ病における所見— 心身医学 54, 422-430.
- 鈴木 英一郎・小塩 真司 (2002). 対人的傷つきやすさ尺度作成の試み—信頼性・妥当性の検討— 日本教育心理学会総会発表論文集 44, 278.